

## 小規模老人施設の研究（梗概） —— 非都市的地域の場合 ——

湯川 聰子  
星野 久

### 緒言

#### 研究目的

過去の老人研究の結論は、老人が長くなじんだ土地を離れることなく地縁・血縁的なきずなを保ちつつ、晩年を過ごすことが、老人の幸福にとって大切であることを示唆している。かつての農村地域は貧しい生活ではあるが、地域共同体として高齢者の生活を安定的に保障する基盤を持っていた。しかしながら過疎化の進行する現在では、もはや地域共同体にも、家庭にも老人福祉機能を満たす条件は残されておらず、希薄化した機能を代替する効果的な老人対策の必要に迫られている。すでに多くの当該過疎地の町村は財政的に苦しい中から養護老人ホームを建設し、運営してきているが、全国一律の基準の下で、必ずしも地元の老人の要求に適合したものはなっていないのが現状であろう。次第に高齢化が進む中で、過疎地の老人の福祉に資する施設づくりはいかにあるべきかを探り、施設計画・運営に資する提言を行うことが本研究の目的である。

#### 研究方法

今回の目的に相応しい条件を保有する既存施設を取り上げ、物的条件および施設入所者の生活の実態を精査しその福祉観を探ることを試みた。また並行して地域の在宅老人についての調査も行った。調査対象としては小規模施設としての成功例といえる養護老人ホームを運営している鹿児島県甑島を選択したが、比較対照として徳島県下祖谷村の2施設をも調査することとした。

#### 本研究の構成

本研究の研究報告書の構成はつぎのとおりである。

#### 緒言

#### 第1章 甑島老人ホームの実態

#### 第2章 在宅老人ホームの住生活

#### 第3章 高齢者の福祉観

#### 結語

### 第1章 甑島老人ホームの実態

#### 1. 長浜敬老園の設立経過

##### 創立の事情

昭和37年当時、すでに老人が多く、下甑村は県下第2位の高齢村（自衛隊があるため平均値では若い）で、部落によっては人口の60%以上が高齢者となるような現象が進んでいた。「老人は金銭に困らない場合でも、面倒がってちゃんとした暮らしをしない」（村当局者談）。都会で60歳の定年を終えて、故郷へ帰って余生を送りたいと考えるUターン現象も始まっていた。50代、60代の人々が老人の面倒をみているが、若い人が帰ってくるわけではないので、このまま10年もたてば老人の面倒をみる人がいなくなるという危機感があった。

生活保護世帯が多かったため、生活保護の救護施設として50人定員、4人1室の施設をつくることとなった。長子相続が伝統で、親を施設へは入れたがらない地区もある中で長浜は本土と交流があって開明的な人が多く、ホームについての偏見も少なかった。敷地は長浜地区の中心部に近い、松林のある砂浜の共有地（区有地）の無償提供である。昭和37年に木造の建物として工事に着手し、昭和38年9月より入居が始まる。昭和38年老人福祉法が制定され老人福祉施設に切り替えられたため、全国でも最後の生活保護救護施設となり、切り替えて面積基準も変わった。最近でこそ意識が変わってきたが、当初、生活保護世帯を優先に入所を勧誘した時には、なかなか定員が埋まらなかった。

##### 建て替えの事情

建設6年後の昭和54年に、台風に襲われて相当な被害を被った。まだ新築後の年数が新しかったので、建て替えには無理があったのだが（壊してみたら、木造で白蟻がつき、大きな巣が3つも出てきたのだが）、古い法基準で悪い条件だったことが幸いして、認可が下りた。昭和55年5月完成（図1）。鉄筋コンクリート造一部2階建て1214m<sup>2</sup>。定員50名。

## 2. 施設・設備

### 旧施設の欠点

8年間の施設運営でいろいろな施設設備の問題点があり、この際、一気に改善したいところが多かった。

居室は8畳押入れつきに3～5人が基準で、(2人室は4.5畳)狭い。4人部屋が一番困るのは物の紛失が多くて、いがみあいになることである。ぼけはじめた老人の集団で、もめごとのトップがこの問題であった。3人にするとかえって難しい。夫婦室との兼ね合いもあり、2人室にしたかった。

北棟、中棟、南棟の各棟の端に汲み取り式の共同便所があり、1か月に1回位入園者が畑の穴に捨てるという処理をしていた。共同でもあり、汚して困った。また、目の見えない人が行くのに不便だった。足の不自由な場合、携帯便器を使わなくてはならないのも具合が悪かった。浴室は男女で1つしかなく、男性がさきに入って、女性は後という運営をしていた。

その他、天気のいい日は中庭で体操などができるが、雨天の日もできる集会室の要求があった。

### 建て替えの際の主たる改善点

- (1) 6畳和室に2人を原則とした。畳の部屋でふとんは押入れに片づけると、自由に横になったりくつろげる。室内で車イスは使えないが、車イスは疲れるし、芝生やカーペットでは滑りが悪くて動けない。
- (2) 各室に腰掛け便器の水洗便所を設置。腰掛け便器に慣れさせた。
- (3) 各室冷暖房完備。冷房は各自の好みもあり、使っていない部屋も多いが、室内で調節できる設備とした。
- (4) 雨天時の体操、運動のため、リハビリ目的として集会室をつくった。広い部屋としては食堂があるが、配膳準備の都合で体操には利用できない。
- (5) 家具・夜具などの私物は自室に持ち込まないきまりとし、押入れに入りきらない分は倉庫の衣装箱に入れて整理している。
- (6) 浴室は男女別の2室になった。しかし、高齢者対応の設計にはなっていない。現在の浴槽は小さくて深過ぎるし、手すりもない。縁が30cmほどあって、高過ぎるので足が上がらない人などは、独りで入れないといった点が職員側から指摘されている。洗い場から転がってでも入れるように、縁を低く洗い場とひと続きにすれば入りやすいと考えて、改造予定である。

## 3. 管理運営

### 職員構成 (全員が公務員)

|           |             |
|-----------|-------------|
| 園長を含めて16名 |             |
| 指導員       | 1           |
| 事務員       | 1           |
| 寮母        | 6 (うち1名は宿直) |
| 看護婦       | 1           |
| 栄養士       | 1           |
| 調理婦       | 5 (うち1名は宿直) |

医者は常駐しないが、村立長浜診療所より週1回巡回診療を行う。

### 運営の特徴

- (1) 発足時は無断外出を禁じていたが、実際はどんどん出たり入ったりして外出している。外出簿に記入したり、寮母に断って出る規定にはなっているが、出口は3か所あり自由に出入りしているに等しい。とくに、長浜地区の家の近い人は、昼間は自宅に帰るとか、農作業の手伝いをする。若い者が働く間にお茶でもわかしてやるなどして、家に帰ると何かの役に立つ(入居者談)。空き家になっている場合でも、自宅に荷物を置いたままにしておいて、時々取りに戻ったりする人は多い。入りっきりの施設ではなくて、気楽に利用する地域施設の感がある。
- (2) 2人部屋が原則で、元気な人、しっかりとした人と、ちょっと弱い人を組み合わせて部屋割りを決めている。いざこざがあったような場合だけ1～3室の入れ換えをすることがある。2階には足の悪い人は上げられないので、部屋割りには制約がある。

プライバシー要求よりも2人部屋で頼り合って生活し、話相手がある方を好む(指導員談)。計画段階から1人部屋の方が望ましいとは考えられていなかった。たとえ喧嘩しながらでも、相手がいる方がいいのではないかと管理者側では考えている。しかし、中には誰からも好かれない人もあり、個性の強い人もある。管理上からは数室を個室としてもよいのだが、現在は静養室などをやりくりして個室的に利用している。

- (3) 共用部分を除くホーム内の掃除、洗濯はほとんど入所者自身の手で行われ、食事の支度と後片づけのみが職員の手で掛かる。これによって、職員の手を省く一方、年取っても働く習慣が持続している。共用の洗濯機があるから、ほとんどの人が自分で洗濯可能である。掃除については、力のない人でも、雑巾をしぼってもらって、周囲を拭く程度に参加している。

- (4) 食事内容について、季節行事を大切にし、家庭的な雰囲気をつくる。みな同じ献立だが、病気の時には特別食となる。島出身の人ばかりなので、好物が魚に偏る。肉嫌いの人が12名もおり、すきやきの献立の時は、別に

魚のテーブルをつくるくらいである。栄養士が3度3度目を配った食事で、栄養的にもバランスが取れている。1人暮らしや、老人世帯で暮らしていた人はきちんとした食事が摂れていなかったため、ここの施設に入ると、元気で長生きするといわれている（栄養士、調理婦談）。目が悪かったのが見えるようになった例もある。

#### 4. 入所者の面接調査

##### 入所者に対する面接聴取り調査の概要

昭和63年7月末の3日間、入居者の面接聴取り調査を行った。調査対象者の概要は表1-1に示すように、訪問時に在室していた人のうち、応答の可能な34人（50人中）であり、対象者の年齢は平均80歳を少し超えている。比較のため、徳島県下の祖谷村の養護老人ホームNとHに質問紙を配付して記入を依頼した。これについては本人記入の困難な場合は職員が質問して記入しているケースもある。なお、施設規模は3か所とも同じ位、年齢は甕島がやや高い。以下に調査結果を述べる。

##### 入所者の出身地

入所者は、表1-2のように全員が甕島の出身であり、しかもホームと同じ字（長浜）の出身者が30人と全体の60%に達している。面接調査を行った際には入所前の居住地に他県をあげる人も3人おり（西宮、尼崎、岡山県）、ホームに入るために帰郷したことになる。また、入所前には島内に居住しているが、定年退職後に島へ帰って、しばらくしてホーム入所という人も6人いた。こうした状況から入所者は若い時からの顔見知りであり、同郷のきずなが、人間関係の上に非常に大きな役割を果たしていることが考えられる。

##### 子どもの所在・親戚や近所の人との交流

誰もが一度は島を後にする土地柄であるが、ホームへ入所している人の場合、子どもがいないという人の比率がかなり高く（表1-3）、子どもがあっても島外にいるケースが多い。しかし、表1-3にみるように、子どもはいなくても、親戚が島内にいるという人は多く、都会人のように、子どもがいなければまったく身寄りのない状態というのではない。



図1 改築後の甕島敬老園平面図

表1-1 調査対象の養護老人ホーム

|         | 甌 島    | Nホーム   | Hホーム   |
|---------|--------|--------|--------|
| 入 所 者 数 | 50人    | 50人    | 55人    |
| 調査対象者数  | 34人    | 40人    | 43人    |
| 男       | 11     | 15     | 17     |
| 女       | 23     | 25     | 26     |
| 対象者年齢   | 69～91歳 | 64～94歳 | 60～91歳 |
| 平均年齢 男  | 81.2歳  | 80.6歳  | 79.2歳  |
| 女       | 80.0   | 75.0   | 76.8   |
| 調 査 方 法 | 面接聴取り  | 質問紙    | 質問紙    |

表1-2 入所者の出身地（入所者全体）

| 出 身 地  | 人 数 | 備 考           |
|--------|-----|---------------|
| ホームと同字 | 30人 | } 甌島内<br>49人* |
| ホームの隣字 | 5   |               |
| 同 村    | 7   |               |
| 島 内    | 7   |               |

\* 島内に前住地のある26人中6人は定年退職後に帰島したものである。

表1-3 子どもの所在（計33人）

|       |     |                        |
|-------|-----|------------------------|
| 子どもなし | 16人 | } 親戚が島内 12人<br>親戚が島外 4 |
| 島外に居住 | 6   |                        |
| 島外+島内 | 7   |                        |
| 不 明   | 4   |                        |

表1-4 子どもや親戚と会う頻度（計33人）

|            |        |                  |
|------------|--------|------------------|
| 夫婦または姉妹で同居 | 8人(4組) | } 頻繁に会う<br>39.4% |
| 毎日～2, 3日おき | 2      |                  |
| 週          | 1回 3   |                  |
| 月          | 1回 6   | } 時々会う 30.3      |
| 2か月に       | 1回 2   |                  |
| 年          | 2回 2   |                  |
| 会わない       | 4      | } 会わない 30.3      |
| 不 明        | 6      |                  |

表1-5 現在の自宅の状況

|          |             |
|----------|-------------|
| 自宅なし     | 44.8% (13人) |
| あ り      | 55.2 (16)   |
| 親代々の家    | 13.8 (4)    |
| 自分で建てた家  | 38.0 (11)   |
| 子どもが建てた家 | 3.4 (1)     |

表1-4にみるように、このホームには夫婦または姉妹で入居しているケースが4組ある。この4組を含めると、3分の1を超える入居者が週1回以上の肉親との交流を持っていることになり、養護老人ホームとしてはユニークなものがある。しかし、その一方、30%の人はまったく家族と会わないか、答えがない（答えたくない、会わない）という家庭的には寂しい人びとである。

しかし、他の老人ホームと異なるのは、家庭的に寂しい人であっても、家族以外との密接な人間関係があるという点である。表1-7にみるように、近所の人との付き合いが深く、親しい友人があるという人が9割に近い（表1-8）。毎日話をする隣人があるかどうかを尋ねた場合、徳島県のNホームでは74%、Hホームでは42%と甌島より低く、親しい友人があるかどうかについては、両ホームともなしとするものが半数を占める（表1-8）。このように他のホームの状況と比較すると、甌島のホームの人々が、生まれ故郷の強いきずなの中で、安定した老後の人間関係を保っていることがわかるであろう。

なお、入所前には持ち家に住んでいた人が多いが、今も半数の人は自宅がそのままにある状態である。中には空き家にして閉めているが、時々帰って衣類を持ってきたりしている人もある。居室の狭さをこうした形でカバーしているといえよう（表1-5）。

### 日々の楽しみと人間関係

面接した老人たちに、毎日の楽しみは何かということ聞いた答えが表1-6である。何も楽しみはないと答えた人もいる中で、1人が2つも3つもあげる場合もあるという複数回答の集計である。ここでの特色は1位に家族や親戚と会うことがあがっている点である。出身がホームと同じ字の人の場合はとくに、自宅に帰るという形での家族との交流が生活の中心になっている。

比較対照のために取り上げたNホームの場合、家族とのだんらんをあげた人は2人、Hホームの場合は4人に過ぎない。そして、「家族とのだんらんも、友人とのおしゃべりも楽しみにはしていない」人がNホームで32人

表1-6 今の楽しみ（複数回答）

|             | 甌 島          |
|-------------|--------------|
| 1位 家族・親戚と会う | 44.8% (13人)  |
| 1 ゲートボール    | 44.8 (13)    |
| 3 友人との付き合い  | 17.2 (5)     |
| 3 何も楽しみはない  | 17.2 (5)     |
| 5 読 書       | 10.3 (3)     |
| 6 入 浴       | 6.9 (2)      |
| 計           | 100.0% (29人) |

注：「食事」という項目は作成していない

表1-7 近所の人たちとの交流

|              | 甌 島          | Nホーム(祖谷)     | Hホーム(祖谷)     |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 毎日話をする       | 82.7% (24人)  | 74.3% (29人)  | 41.5% (17人)  |
| 親しく話をするのではない | 17.2 (5)     | 25.6 (10)    | 58.5 (24)    |
| 不明を除く計       | 100.0% (29人) | 100.0% (39人) | 100.0% (41人) |

表1-8 親しい友人の有無

|    | 甌 島          | N            | H            |
|----|--------------|--------------|--------------|
| なし | 10.3% (3人)   | 50.0% (20人)  | 44.2% (19人)  |
| あり | 89.7% (26)   | 50.0 (20)    | 55.8 (24)    |
| 計  | 100.0% (29人) | 100.0% (40人) | 100.0% (43人) |

表1-9 満足度(総合的にみた家族・仕事・住まいなどの日常生活の満足の程度は?)

|                  | 甌 島          | N            | H            |
|------------------|--------------|--------------|--------------|
| 満足 (5点)          | 44.8% (13人)  | 37.5% (15人)  | 25.6% (11人)  |
| 大体満足 (4点)        | 37.9 (11)    | 50.0 (20)    | 34.8 (15)    |
| どちらともいえない (3点)   | 10.3 (3)     | 7.5 (3)      | 25.6 (11)    |
| 大体不満足 (2点)       | 6.9 (2)      | 5.0 (2)      | 7.0 (3)      |
| 不満足 (1点)         | 0.0 (0)      | 0.0 (0)      | 7.0 (3)      |
| 計                | 100.0% (29人) | 100.0% (40人) | 100.0% (43人) |
| 平均点(*5%水準で有意差あり) | 4.21点*       | 4.20点        | 3.65点*       |

表1-10 幸福度(あなたは現在幸せですか?)

|                  | 甌 島          | N            | H            |
|------------------|--------------|--------------|--------------|
| 幸せである (5点)       | 71.5% (20人)  | 60.0% (24人)  | 40.5% (17人)  |
| やや幸せである (4点)     | 14.3 (4)     | 17.5 (7)     | 33.3 (14)    |
| 他の人と同じくらい (3点)   | 7.1 (2)      | 12.5 (5)     | 11.9 (5)     |
| やや不幸せ (2点)       | 7.1 (2)      | 7.5 (3)      | 11.9 (5)     |
| 不幸せである (1点)      | 0.0 (0)      | 2.5 (1)      | 2.4 (1)      |
| 計                | 100.0% (28人) | 100.0% (40人) | 100.0% (42人) |
| 平均点(*5%水準で有意差あり) | 4.50点*       | 4.25点        | 3.90点*       |

表1-11 孤独感(孤独感(寂しさ)を感じることはありますか?)

|                   | 甌 島          | N            | H            |
|-------------------|--------------|--------------|--------------|
| まったくない (4点)       | 34.5% (10人)  | 15.4% (6人)   | 9.3% (4人)    |
| あまりない (3点)        | 34.5 (10)    | 17.9 (7)     | 14.0 (6)     |
| 時々ある (2点)         | 17.2 (5)     | 61.5 (24)    | 60.5 (26)    |
| よくある (1点)         | 13.8 (4)     | 5.1 (2)      | 16.3 (7)     |
| 計                 | 100.0% (29人) | 100.0% (39人) | 100.0% (43人) |
| 平均点(**1%水準で有意差あり) | 2.90点**      | 2.44点**      | 2.10点**      |

(80%)、Hホームの場合にも24人(56%)となっていることを考えると、甌島のケースは他の2つの養護老人ホームとは様相を異にしていることが知られる。

すなわち、この結果が示すように、甌島の老人ホームの入所者は、親類縁者と縁を切って、捨てられてしまったような形で入所しているのではない。親戚知人とのつながりは今まで通りに保ちつつ、ホームが家庭の代わりに老人の日常生活を保障する役割を果たす地域福祉施設となっているのである。入所者に面接した場合に、「ここへ入って本当によかった。安心して暮らせる」という言葉がつきつきに出てくるところからも、推察される場所である。

甌島の場合、今の楽しみの1位には「家族・親戚と会う」ことと並んでゲートボールが50%近い高率であげられている。これは他のホームにおいても人気の高いスポーツである。真夏の炎天下の暑さをものともせず、元気の掛け声と共にプレイが続く様子には、平均年齢が80歳を過ぎ、3分の2が女性である老人ホームについて、一般的に描かれるイメージとは程遠い活気が感じられる。

甌島の老人がゲートボールに打ち興じるさまは、まさに、昔の小学校時代の仲間の遊びを再現している光景である。肉親以上に気のおけない昔からの仲間同士が、再集合しているといえる。そうした思いはとくに長浜地区(ホームと同字)の人に強く意識され、他の村、他の字からは字ごとにホームがほしいと望まれている。

### 満足度・幸福度・孤独感

この面接を行う間に、何度か形を変えて、現在の生活に対する満足度、幸福度、孤独感といったことを聞いてみた。満足度については、「家族や仕事、住まいなどの日常生活の満足の程度は？」という質問をしている。5段階に分けて点数つけをするため、即座に答えの出ない時は「満足、大体満足、どちらともいえない、大体不満足、不満足に分けたらどこら辺りででしょうか」と聴いている。その結果が表1-9である。徳島県のNホームとはほぼ等しいが、Hホームとは有意の差で甌島のホームの老人は満足度が高いといえる。

幸福度については、「あなたは現在幸せですか」という質問を行っている。結果は表1-10のとおりである。甌島の幸福度は「幸せである」と即答した人の比率が70%を超えるという非常に高率を示しており、Hホームとの比較では5%水準での有意差がみられる(表1-10)。

つぎに、孤独感(寂しさ)について尋ねた答えとしては、「まったくない」という人と「あまりない」という人を合わせると、甌島のホームでは70%近くにのぼり、この項では、満足度・幸福度において甌島に近いレベルにあったNホームとの間にも有意差がみられ、他のホーム

との開きは大きい(表1-11)。

当初、ホームの老人は世話になっている遠慮から本音をいわずに、「なんでも結構。ありがたいことです」と現状肯定的に答えるのではないかという疑念があった。しかし、今回の調査はまったくホームと無縁のわれわれや、大学院生が話込んだ中では非常に明るい雰囲気を感じられたし、即座に出てきた「幸せである」との答えは、本音であるとみてよい(一方、徳島県下のNホームとHホームは職員の手から配付された質問紙調査であるが)。一般に老人は諦めの境地に達しており、現状に対して満足度が高いといわれており、こうした諦観から、一般に年齢が上がると満足度が上がる調査結果が通例である。昭62年度経企庁調査では標準的には満足している人の比率は50%程度だが、70歳以上では71.4%とされている(3分類で)。また、同調査で低所得分位層では39.8%という数字も出ている。以上のような観点からすると、甌島のホームの老人は一般の老人の水準としても、他ホームの老人との比較においても幸福度が高く、孤独感が少ないといえよう。

日本の老人の場合は幸福感に影響する因子として、子どもとの交流の程度が大きく影響するといわれる。<sup>2)</sup>2人1組の6畳間の貧しげな住環境にあり、経済的には低所得層に属する暮らしの中で、子どもとの縁が薄いにもかかわらず幸福度が高いというところに、子どもに代わるものとしての地域共同体の連帯感の支えが実感される。

### 住環境についての入所者の意見

一般に都市の老人ホームでは個室化の方向に進んでおり、イス・ベッド式で車イスがスイスイと通れる施設が当然のことと考えられている。甌島の老人ホームでは建て替えの際に2人室制とし、食堂さき畳敷にしている。

運営側からの話として聞いたことは居住者側ではどう考えられているのだろうか。

表1-12に入所者の住環境面に関する希望がまとめられている。まず個室がよいか、大勢がよいかという質問に関しては、現在の2人部屋は概ね気に入られていることがわかる。とくに4人部屋、3人部屋の経験のある人からみた場合には2人部屋は非常に落ち着くし、いざという時にも安心だと考えられている。現代的設備の整ったホームならば、ブザーをつけたり、一定時間ドアが開閉されなかったりした時の監視システムがつけられているが、ここではそういった設備がなくても、同室者が変事を報せることができるから、お互いに心強いわけである。しかし、冷房の好き嫌い、暖房の温度の好み、テレビやラジオが持ち込めないなどの欠点が指摘されており、30%の人は個室がほしいと考えていることがわかる。

元気な人が弱っている人や、ぼけの進んだ人と組み合

わされていることについて、元気な人の方は嫌がったり迷惑がってはいないのだろうか。この点を確かめたくて質問してみると、「いつ自分がお世話になるかわからない。お互いさまなのだから」ときわめて当然とする答えが返ってきた。非常に人間的な考え方であり、信仰を持つ人が多いということも関係があるかもしれない。

1人分のスペースとして、どの程度の部屋の広さがいいかということについては、6畳程度ほしいという答えが72%、ついで4畳半が21%となっており、現状の3畳でよいという答えは少ない。明らかに居室が狭過ぎる状態である。そして日常の起き伏しする部屋は畳敷で、ふとんを敷いて昼間は押入れに片づけたいと考えている。他の施設から移ってきた人の中には、ベッドに慣れていてベッドがいいという人も少数ながらいる。

専用あるいは共同使用の台所が必要かどうかについては、関心のない人が多かった。これは、ホームに入ったきりで一步も外へ出ない生活ではなく、自宅や親戚の家にいつでも帰って、出たり入ったりしているところからくるものと思われる。浴室については、一般的には現状の共同浴室に満足している。自分専用のがほしいという気持ちよりもわずらわしさの方が強い。これは掃除その他の管理面が居住者にまかされていることとも関係がある。現状の浴室が狭くて、明らかに入浴時間などの上に大きな制約があるにもかかわらず、本人たちの大きな関心事にはなっていない。むしろ、その改善には職員側が熱心である。

便所については、各部屋ごとに水洗・腰掛け式の便所

が設けられている現状に一応満足しており、自分専用という意見は少ない。

以上の建築面に関する意見は大変つましいものであるが、のちにみるように、甌島在来の住まいの実態との比較で考えるならば、居室の広さを除いては何の不満も出てこないということは納得できよう。

## 第2章 在宅老人ホームの住生活

甌島の老人ホーム研究を行うに際し、自宅で生活する老人の生活の実態を知り、比較検討することが必要であると考えて、この調査を並行して行ったものである。

### 1. 調査地区の概要

上甌村江石地区を取り上げ、36戸の老人世帯と2戸の若年世帯の事例調査を行った。養護老人ホームのある長浜地区は下甌島の中心的な集落にあるが、江石地区はその隣島である上甌島にある臨海農村集落である。昭和30年代より急激な過疎化が進み、現在では65歳以上人口が集落人口の40%に達し、老人世帯が目立つ。

当地区は共有耕地割り替え制度を近年まで続け、共同体意識の強い土地柄として知られており、社会学や農村計画学研究者の研究対象として注目されてきた。昭和40年代に長崎総合科学大学白砂剛二教授のグループによる精査により、当地区の伝統的な住生活の実態が明らかにされている。<sup>3)</sup>それによれば、鹿児島県によくある分棟型

表1-12 ホームの建築面に対する希望

|                  |               |             |                                     |          |           |
|------------------|---------------|-------------|-------------------------------------|----------|-----------|
| 個室がよいか<br>(計29人) | 非常にほしい        | 6.9%(2人)    | テレビをみる場所                            | 皆でみる方がいい | 66.7(18人) |
|                  | ほしい           | 24.2(7)     |                                     | 自分用でみたい  | 29.6(8)   |
|                  | どうでもよい        | 6.9(2)      |                                     | その他      | 3.7(1)    |
|                  | 数人一緒          | 58.6(17)    |                                     |          |           |
|                  | 大勢がよい         | 3.4(1)      |                                     |          |           |
| 1人分のスペース         | 3畳            | 6.9%(2人)    | 共同浴室が体の<br>具合が悪くて<br>入りにくくは<br>ないか? | 困らない     | 82.8(24人) |
|                  | 4.5畳          | 20.7(6)     |                                     | 困った経験あり  | 17.2(5)   |
|                  | 6畳            | 72.4(21)    |                                     |          |           |
|                  | 8畳以上          | 0.0(0)      |                                     |          |           |
| 畳かイス式か           | 畳             | 100.0%(29人) | 浴室は皆で入る<br>のがいいか                    | 共用がよい    | 86.2(25人) |
|                  | イス式           | 0.0(0)      |                                     | 自分用がよい   | 13.8(4)   |
| ベッドかふとんか         | ベッド           | 14.3(4人)    | 自分用の洗面所                             | 自室にほしい   | 44.8(13人) |
|                  | ふとん           | 85.7(24)    |                                     | 数人共同でよい  | 55.2(16)  |
| 専用の台所の必要性        | 不要            | 3.2%(27人)   | 便所                                  | 自分用がほしい  | 27.6(8人)  |
|                  | お茶程度          | 93.4(1)     |                                     | 数人共同でよい  | 72.4(21)  |
|                  | 住宅並み          | 3.4(1)      |                                     | 大勢共同でよい  | 0.0(0)    |
| 共同で使える台所         | 不要            | 79.3%(23人)  | ホームの交通の便                            | とても便利    | 16.7(4人)  |
|                  | ほしい           | 13.8(4)     |                                     | 便利       | 33.3(8)   |
|                  | 冷蔵庫と湯沸器<br>程度 | 6.9(2)      |                                     | まあまあ     | 45.8(11)  |
|                  |               |             |                                     | 不便       | 4.2(1)    |

表2-1 調査対象の年齢構成

| 性別\年齢   | 計   | 39歳以下 | 40～49 | 50～59 | 60～69 | 70～79 | 80以上 | 不明 | 平均年齢  |
|---------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|------|----|-------|
| 男性(世帯主) | 31人 | 2     | —     | 2     | 11    | 9     | 7    |    | 72.3歳 |
| 女性      | 38  | 2     | —     | 4     | 18    | 10    | 3    | 1  | 69.1歳 |

30代の世帯は老人世帯との比較対照として調査したもの。1軒は若い核家族、もう1軒は3世代居住、平均年齢は30代を除く。表平均年齢は若年世帯を除く50歳以上の人の平均。

表2-2 調査対象の生活歴(老人世帯のみ)

| 性別\生活歴  | 計   | 島内農業 | 島内農外 | 県下農外 | 若年帰郷 | 出稼ぎ | 老後帰郷 | 他 |
|---------|-----|------|------|------|------|-----|------|---|
| 男性(世帯主) | 36人 | 6    | 1    | 3    | 11   | 3   | 7    | 5 |
| 女性      | 36  | 1    | 3    | 2    | 14   | 0   | 7    | 9 |

世帯主の生活歴は死別した夫の経歴がわかっている場合はそれも含めた。

表2-3 住宅規模(老人世帯のみ)

| 住宅規模 | 3室  | 4室 | 5室 | 6室 | 7室 | 8室 |
|------|-----|----|----|----|----|----|
| 計    | 36例 | 14 | 14 | 5  | 2  | 1  |

表2-4 便所の型(老人世帯のみ)

| 便所の型 | 外便所のみ | 大小別室 | 和式両用 | 洋式両用 |
|------|-------|------|------|------|
| 計    | 36例   | 1    | 17   | 14   |

表2-5 建築年代(老人世帯のみ)

| 建築年代 | 戦前  | 昭和20年代 | 30年代 | 40年代 | 50年代 | 60年代 |
|------|-----|--------|------|------|------|------|
| 計    | 36例 | 9      | 3    | 6    | 6    | 9    |

表2-6 間取りの型と世帯主生活歴

| 間取\生活歴 | 計   | 島内農業 | 島内農外 | 県下農外 | 若年帰郷 | 出稼ぎ | 老後帰郷 | 他 |
|--------|-----|------|------|------|------|-----|------|---|
| 改造在来型  | 13例 | 4    | —    | 2    | 4    | 1   | 1    | 1 |
| 設備革新型  | 12  | 2    | —    | —    | 6    | —   | 1    | 3 |
| 中廊下型   | 7   | —    | 1    | 1    | 1    | 1   | 3    | — |
| 都市型    | 2   | —    | —    | —    | —    | —   | 2    | — |
| 間取り不明  | 2   | —    | —    | —    | —    | 1   | —    | 1 |
| 計      | 36  | 6    | 1    | 3    | 11   | 3   | 7    | 5 |

表2-7 夕食時起居様式と世帯主生活歴

( )内は場合によってはユカザになる例

| 様式\生活歴 | 計   | 島内農業 | 島内農外 | 県下農外 | 若年帰郷 | 出稼ぎ | 老後帰郷 | 他 |
|--------|-----|------|------|------|------|-----|------|---|
| ユカザ食事  | 27例 | 6    | 1    | 2    | 6    | 3   | 5    | 4 |
| イスザ食事  | 9   | —    | —    | 1    | 5(2) | —   | 2    | 1 |
| 計      | 36  | 6    | 1    | 3    | 11   | 3   | 7    | 5 |



の床の高い（70cm以上）平家であり、風呂・便所・炊事場は別棟になっていた。主屋は田の字型平面構成の小規模なもので、一般に玄関はなく、庭側に縁側を取る。戦後、縁側の一部に玄関や床の間を取り、土間を板の間化して設備部分を主屋内につくり直す例が増えていた。

## 2. 調査対象世帯の概要（年齢構成・生活歴）

老人に質問調査を行うため、問答可能な老人のいる世帯全数を対象とした（世帯主平均年齢72.3歳、表2-1）。甑島は昔から関西方面への出稼ぎが盛んなところである。その生活歴と住生活様式の強い関連が予想されるところから、職業生活を軸にした生活歴をつぎの6つのパターンに分けて考察を進めた（表2-2）。

**島内農業型** ほとんど島を出ないで、農漁業・商業などに従事していた人。

**島内農外型** ほとんど島を出ないで、サラリーマン生活（農協・会社・教職など）をしていた人。

**県下農外型** 鹿児島県下で異動のあるサラリーマン生活（官公庁・会社・教員など）をしていた土着インテリ層。

**若年帰郷型** 若い時に10年未満の県外生活の経験があるが、その後は島で生活していた人（戦前、大陸に行っていた引き揚げ者を含む）。女性では多い。

**出稼ぎ型** 中年になっても島外へ出稼ぎに行ったり、戻ったりしている人。

**老後帰郷型** 働き盛りを県外で過ごし、老後（定年退職後）甑島に帰ってきた人。元のままに家（地所）がある場合もあるが親戚知人から土地を分けてもらって建てることもある。退職金や年金を持っており、経済力がある。20%に相当する7世帯がこの型であり、今後も増えると予想される。

## 3. 江石地区住宅の現状

僻地の島で、共同体的生活習慣があり、大工が同じ人であるなどの条件から、地区の住宅は非常に似通っている。近年では鉄筋コンクリート造の2階建ても増えているが、台風を懸念して平家建てが中心である。室数としては3室または4室が中心である（表2-3）。伝統型の別棟形態は嫌われ、台所、便所・風呂を主屋に取り込んでいる（表2-4）。建築年代（表2-5）や個人の生活歴ともからんで住生活の“進化”の度合いには差があり、間取りを典型化すると、改造在来型・設備革新型・中廊下型・都市型と名づけた（説明省略）4種くらいに分類される（表2-6）。伝統型をそのままに住み続けている家はもはやみることができない。

## 4. 甑島における一般老人の住生活についての結論

### プライバシーの欠如と濃密な近所付き合い

広々とした自然環境の中にあるが、人の住まいは、一定地域の部落にまとまっており、歩いて行ける範囲で日常の用はこと足りる。冠婚葬祭はいうに及ばず、日常生活の上で（たとえば魚は必ずもらって食べるなど）、都会化した地域とは比較にならない濃密な近所付き合いがある。これがプライバシー感覚の欠如と表裏一体となっており、縁先から近所の家に上がり込み、近所の家のことは何でもわかっているといった状況になる。1人暮らしであっても、都会の独居生活のように、口のきき方も忘れてしまうというようなことは起り得ない。

### 畳生活の愛好

前述の生活歴の違いによって、住生活の志向も異なっている。老後帰郷群では、家計状況が豊かなため盛んに改築が行われ、在来型を踏襲したスタイルの住宅は少ない。しかしながら、和室の続き間を基本として、日常生活が畳の上のユカザで展開することによってなりたっているところに共通点がある。全国的なイスザ化傾向から見ると、この地区の老人の住まいでは、ユカザ様式の食事形態が目立って多い（表2-7）。ユカザとイスザに分けると3：1の割合でユカザ優勢である。本調査の範囲では、足の不自由な人のいる場合や、老後帰郷群ではイスザ食事がやや多いという程度である。

ベッド使用は皆無であり、だんらんや来客の接待はユカザが中心である。応接セットを持つ住宅も4例あるが、帰省する若い世代の使用が中心のようである。くつろぐ時や昼寝の時もみな畳でごろ寝という形であり、日常のくつろぐ場にソファなどのイスザはみられない。夏期はとくに風の通り路を求めて自在に部屋を使う。

現状の住様式に対する嗜好を満足させながら、甑島の老人住宅あるいは老人ホームの計画をするならば、畳生活を中心としたユカザ様式をとって、家庭的な雰囲気を保つという条件は動かせないだろう。畳の上では介助者がいたとしても、車イスは非常に使いにくく、廊下の移動だけに使うことにならざるを得ない。しかしながら、機能性だけでは解決しない問題があり、現状の甑島のホームはその点、情緒的な意味で満足感を与えることに現実的解決をしているということができよう。

### 便所の洋風化および家庭電化器具の普及

基本的な生活様式はなかなか変わらないが、設備面での革新は進んでいる。近年まで外便所の農家が普通であった僻地の部落であるにもかかわらず、洋式の腰掛け便器の使いやすさがかなり知られてきており、急速に普及している。旧来の生活にはなかった様式であるが、姿

勢が楽で高齢者向きであることから受け入れられている。

電話はほぼ100%の普及率である他、生活様式を決定する上に大きな影響をもつテレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫の3種については100%の普及率である。ただし、南国にもかかわらず、クーラーの普及率は低い。長年の労働できたえ抜いた元気な老人群であり、暑ければ風通しのよい部屋で昼寝をすればよしという、昔型ののんびりした生活感覚である。老人ホームの部屋ごとに調節可能なクーラーが設置されているにもかかわらず、ほとんどの部屋ではスイッチが入れられず、窓と入口ドアが開け放してあるのは、こういう住生活の習慣と前述のようにプライバシー感覚が希薄であることに由来する。

### 第3章 高齢者の福祉観

過疎の進行する現実には、貧富の別なく老後の介護問題への不安をつくり出している。子女を頼って年老いてから都会へ移住するケースもあるのだが、子どもらの「親を呼び寄せて孝行したい」という気持がそのまま老人の幸福につながるとはいえないようである。「近所にはお茶を飲みに行く友達もいない」と都会生活の味気なさを訴えて帰ってきてしまった老人の言葉が象徴的である。

故郷の自然や、人間関係に対する愛着は非常に強いものがあり、できればこのまま、この土地に住み続けられればよいと願っている。古い家制度にしがみついて暮らしてきた地方の老人が、自分の老後を老人ホームで終わるといった考えに同意するなどということは、少し前までは考えられなかったであろう。若い世代がいないという状況に鑑み、故郷の地に自分たちのための老人ホームをつくって入りたいという考えが、次第に現実のものとなっている。面接を続ける中で、自分の家を死ぬまで離れないという人がある一方、住みよいホームの増設を望む声が多かったというのが、今回の結論の1つである。高齢化が進行する現実が、老人たちの意識を変えていかざるを得ないという当初の仮説が証明されたといえる。

### 結語

高齢化が進む過疎地域において、幸福な老後を保障するには、どのような老人ホームが必要かという観点から、甑島のケースを取り上げて調査を行った。その結果を踏まえて、過疎地域の老人ホームに関する結論をまとめればつぎのようになる。

I 狭い範囲の地域社会にサービスするミニ施設であること。できれば昔の分校区、部落単位が理想であるが、少なくとも小学校区に1つの老人ホームをつくり、歩いて行ける範囲に自宅や親族、知人がいること。甑島

の場合ならば、現状の下甑村に加えて、上甑村、里村、鹿島村に各1か所の設置が最小限度必要である。

- II 機能性よりも旧来の生活様式を尊重すること。
- III 新築施設でなくても、廃校跡や空き家の活用が可能である。恒久的な立派に整った施設でなくても、目的は達せられる。学校の統廃合が進む地域では分校跡などを、また、空き家が多い地域では、空き家群がまとまっている場合にはこれも利用可能である。
- IV 地域内の余剰労働力の活用、交通不便な過疎地であっても同村内ならば、主婦の働き場所として歓迎され、人手は得られる。
- V 特養機能の併設

なお、今回の調査は過疎地の老人ホームを対象としたものであるが、そこから得られる結論は一般の老人ホームの計画に対する重要な示唆を含んでいる。すなわち、同郷者同士のホームであるということが老人の気持の安定につながり、生活感覚の同質性をもたらすという点である。一般公募する不特定多数者を入所対象とする施設ではなく、限定少数者を入居資格とする施設（たとえば、女学校・女子大の同窓会や、会社の共済組合など）を計画すれば、一般のホームでは得られない満足度の高いものになるであろうということである。どんな施設に入るのかということ以上に、誰と一緒に暮らすのかということが重要であるということであろう。

### <参考文献>

- 1) 森幹郎著、老人問題とは何か、ミネルヴァ書房
- 2) 浴風会調査研究紀要第63輯（昭和54年）
- 3) 財団法人新住宅普及会（現：助住宅総合研究財団）昭和50年刊：白砂剛二、農漁村における住環境の更新に関する研究（研究 No. 7402）

### <研究組織>

|    |       |            |
|----|-------|------------|
| 主査 | 湯川 聰子 | 鳴門教育大学助教授  |
| 委員 | 星野 久  | 鳴門教育大学教授   |
| 協力 | 久世 直子 | 鳴門教育大学大学院生 |